

労働問題、所詮、気分しだいかも

川喜多, 喬 / Kawakita, Takashi

(出版者 / Publisher)

東京都立労働研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

労働研究所報 / 労働研究所報

(号 / Number)

11

(開始ページ / Start Page)

60

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

1990-03

随 想

労働問題、所詮、気分しだいかも



東京外国語大学助教授 川喜多 喬

おおげさに言うのが組合商売

最近、労働組合の講演に招かれることが多くなった。執行部をヨイショして家が立つような良心的知識人ではない、と断わっても、あの先生はマイホームのローンが苦しいから安く引き受けてくれるという評判が立ったからか、労政事務所や地方自治体の研修所での講演におけるような、驚くべき安さの講演料の倍以上はくれるので、出かけていく。先日もある組合の勉強会に出る前に、事前に大会報告書を手に入れたところ、「われわれの生活は日に日に苦しくなり、職場には余裕が失われ、人間関係はトゲトゲしく、ストレスは溜り……」と書いてある。それはお気の毒、さぞ組合員、みんな頬はこけ、髪は白くなり、目の回りには隈ができ、怒りの眼差しであろうと——そんなに苦しいはずの労働者がどういうわけか私の愛用するカプセルホテルではなく1泊2万はする都心のホテルで勉強会をやる不思議さに気が付かず——出かけて行った所、ふくよかな顔つきの面々が立派な服装でお座りであった。別室で待つ間に最近数年間の議案書を読ませて頂いたところ、毎年同じことが書いてある。毎年、去年より苦しく厳しく貧しくなっているのである。さぞ、昔はよかったのであろう。そんなにひどい現場ならどうして辞めないのか、と不思議に思いながら委員長の挨拶を聞いていて、吹き出した——会

社の業績は戦後最高水準、賃金も最高水準なのである。「ゆとり」を取り戻すにはどうしたらいいか、という講演だったので、開口一番、やるきをなくして他社にまけなさい、会社を減ぼしなさい、お客様をコケにしなさい、仕事をさぼって出世を諦めなさい、自己啓発など勉強はやめなさい、組合はあばれなさい、企業イメージをダウンさせなさい等などしゃべったのである。

みかけを変えずに「意識改革」？

また他の、完全週休2日制を「勝ちとった」労働組合は、電話でこんなテーマで講演を頼んできた——「週休2日制時代に労働者はどう対応すべきか」。おもわず受話器を取り落としたものである。「勝手にしたらどうでしょうか」と答えたら、ケゲンそうな組合役員の声がかえってきた。「労働者のトータルな生活に関わる」等とかつこのいい（と本人は思っているが、きわめてかつこの悪い）役割を組合に課していると、この自由尊重の時代にこういう余暇善用思想が生まれるのである。ある労働組合、最近ギャルが温泉好きなのに目をつけて、近年減る一方だった組合レクのヒントを得たと思ひ込み、〇〇温泉高級旅館の旅を企画した所、集まったのはオジサンばかり、ギャルの申し込みはゼロ。どうしてでしょうかと頭を抱えているが、簡単な理由。要するに好きな人と好きなよ

うに行きたいのである。温泉につくとすぐ裸になり、浴衣をだらしく着込み、カラオケに拍手を求めるオジサン役員とは行きたくないのである。おまけに組合行事という、ついつい行き帰りのバスで役員つまらない挨拶があるのである。せっかく伸び伸びしようと思うのに団結ガンバリマシヨウ等と興ざめなことを言うやからも出てくる。「発想の転換」「意識改革」等ときれいごとを言ったって、やらなきゃなんにもならないのである。ある大企業の部長さんクラス、部長会議を開いているうちに、どうして最近若者に同業他社の製品が売れているかわからないという話になった。若者の感性と言われてもピンと来ない。そこで最近の若者をつぶさに観察しようというわけで、ディスコのマハラジャに出かけてみるようになった。しかしドブネズミ・ルックではいかんというぐらいの知恵はあるから、カジュアルな服装でと申し合わせ——この申し合わせが大好きなところが集団主義者の特徴である——、当日6時半に集合した20数人の服装は全員ゴルフウェアだったそうである。さんざん遊んで、いやあ俺たちだって捨てたもんじゃないとしゃいで帰った翌日、ディスコ側から二度と来ないでくれという電話が入ったそうだ（噂である）。理屈の持つ力は小さいのである。新時代に対応した労働運動を、等というおいて同じ行動を繰り返すのはこれがわかっていないからである。人を何が変えるか——ジェームズ・ステファンの言葉やよし、「今日、心が感じていることを、明日になって、頭が知る」。

風潮は勝手に変わる

衣装を変えれば気分が変わる。ところが見かけだけ変えても本質が変わらなければ何にもならない、と固いことを言う人間が世の中には多いのである。見かけと本質を分けて考える考え

方自身が私には理解不能だが、世の中には例えば資本主義の本質などがわかっておられる学者がいて、いいですね、見かけの変化を追う必要がないから、勉強しなくて済むのである。もちろん調査などやることではない。世論調査、意識調査など唾棄すべきものである——あるいは自分の理解している本質に合致する結果が出ている都合のよい調査だけが真実をいつているのである。それにしてもずいぶんと世の中の意味、風潮は変わったものであり、ついにないだまで、ああ日本はいい、欧米のように失業の嵐が吹き荒れなくて、と言われたのに、最近は欧米のような豊かさ、ゆとりが欠けると言われるようになったのである。豊かさが欠けるように思うのはなぜか——端的に言えばよほど豊かになったからであろう。ゆとりを言うようになぜなかったか。ゆとりを言えるほどゆとりが出てきたせいであろう。しかしもっと重要な原因は、ゆとりや豊かさという言葉の氾濫が意識を変えてしまったということだろう。いまや脅迫症的ゆとり追求症候群が町にあふれている。ゆとりをもとめなくっちゃと、世界中に出かけてせわしなく旅をしブランド品を買いあさり、あらゆる地方自治体がやる「個性ある」イベントに出かけ、雑誌に進められた店に出かけたことがないのはゆとりがないせいだと思う。国民のやることなすことに口を出すのが使命の官公庁に、ゴロ寝は消極的な余暇と決めつけられ、積極的な余暇が雇用を増やすとのたまわれば、社会的使命感をもって外出せざるをえない。知的なサラリーマンは「時間管理」がうまいと煽とられて「時間管理」グッズを買いあさり、右往左往する——老子いわく、『民の死を軽んずるは、その生を求むるが厚きをもってす』。要するに強欲なんですな、生きているうちに天国を見たいと焦りまくっているわけである。

質的転換は量へのこだわりから？

ことばが風潮を変えた最たるものは、最近やたらと目にする「働きすぎ」ということばであろう。日本人は平均して欧米人より〇〇時間長く働きすぎ、という常套文句である。「長く働いている」というのは事実である。「長く働きすぎ」というのは価値付与行為である。同じ時間差をもって欧米人は「短く働きすぎ」とも言えるからである。同僚が早く出世したというのは事実で、「早すぎる」というのは価値付与行為である。欧米が何でもお手本だというなら日本の防衛費対GNP比は「低すぎ」で、日本の失業率は「低すぎ」である。テレビのチャンネルは「多すぎ」るし、学歴格差は「なさすぎ」である。犯罪者は「検挙しすぎ」で、アル中は「少なすぎる」し、ドラッグ中毒も明らかに「少なすぎる」。

いや労働時間は違う、そもそも短ければ短いほどがいい、というならどうして「人間は生活の心配がなくても働ける間は働くのがしあわせだ」という者が87%もいるのであろうか（NHK世論調査「日本人の職業意識」1987年）。労働者は声を挙げて「働くのは苦痛だ、働くのをやめよう」と言うべきだし、高齢者雇用開発協会やシルバー人材センターは解散を促すべきである。しかしかような極論を言う者はいない——きわめて常識人である筆者もそういう暴論を言うものではない。過ぎるか過ぎないかはしよせん、気分が決めるのである。日本と欧米の製造業現場労働者の労働時間に大きな格差があることを理由に、どういうわけかお役所がそれでは休もうと言い出して世論がとがめないのも、そういう気分であるからである。日本の中堅社員は働き過ぎだ、では若者にもっと休みを、というような動きになってどこかおかしいと誰も言わないのも、世の気分である。中小企業の労働時間が長すぎる、では銀行が率先して

お手本を、ということになるのも気分である。

しかし、では労働時間は短縮されたか——久しぶりの景気にうかれて「お忙しいですか」「いやあ、お陰様で」と言う人ばかりである。不況地帯に行って「お暇でいいですね」という変人は誰もいない。もはや量の時代ではない、生活の質を問う時代だと言って、賃金の額を問題にし、住宅の面積を問題にし、労働時間を問題にし、通勤時間を問題にし、要するに従来と変わらず量ばかりを問題にする——モーリー・ブルックマンがこう言っている；「われわれみんな進歩には賛成だ、但し何の変化なしにすませられるなら」。

ジョイフル・ストレス

こころの豊かさを求める人が多くなったそう。しかしやはり心の豊かさをカネや資産やモノの量で計ろうという傾向はなくなる。モノを追うことを反省せよ、と説く人も、心の豊かさはいりません、モノが欲しいので、という筆者にモノを譲ってくれはしまい。土地を分けてくれはしまい。モノの上にココロがほしいだけの話である。カネだけでは満足しないだけで、カネがいらないわけではない——嘘だと言うならこころの豊かさを求めて労働運動は賃下げを提案せよ。要するにほしいものが増えただけである。ほしいものが増えれば飢餓感が強まるのはものの道理である。飢餓感が強まっていっそうアクセクと焦るのは勢いである。そしてアクセクするのが「貧乏人の美学」であった時代に儒教精神などをたたき込まれてみれば、アクセクする中に幸せはくると思うのは道理である——『菜根譚』にいわく——静中の静は真の静にあらず、動く処に静を得ること来たりて、まさにこれ性天の真の境なり。

本当にゆとりがほしければカラオケに行くのをやめてまっすぐ帰ってはどうか。買い物なぞ

せずにまっすぐ帰ってはどうか（もともと公務員試験を受ければよかったのだ）。いやあ、ストレスが大きい職場生活だからこそ、憂さ晴らしが必要になるのだ、とカラオケ派は言い、ウインドショッピングも家事よ、どうして女ばかりに家事を押し付けるの、とワーキング・ウーマンは言うであろう。たしかにアンケート調査をすれば職場を原因とするストレスが増している——しかし、このアンケート調査と称するもの、私のような社会学者が好きな「あなたはストレスを感じますか」といったしろもので、ストレスという言葉をごく軽くとってしまう人々がうん、あるあるということになっているのではないだろうか。

軽い気持ちで理解できるストレスの、ではない職場は望ましいだろうか。いやあストレスが貯ってね、とストレスを勲章扱いする、仕事を通じて自己実現したい、という欲望は異常な欲望だろうか？——ストレスって楽しい、ジョイフル・ストレスってないのだろうか。「ビジネスマンの身体的疲労度はかなり高い、しかし仕事に乗っているとき、どのような苛酷なタイム・スケジュールでも、疲労を感じながらもこなすことができる。なかには、疲労を感じるゆとりさえない、という方もおられるに違いない。仕事上の充足感があるためである。」(平井富雄)

ワーカホリック退治には諦めの思想を

別に忙しいことがそれ自体いいことではない、何のために忙しいかということが重要なのだとモラリスト風に言ってみよう（——もちろん暇なことがそれ自体いいことではない、何で暇になったかが重要なのだとも言えるが、大学が甘いから、親が甘いから、会社が甘いから、世間が甘いから、どんな理由があるにせよ暇はいいと言う学生には説得力はない——）。すなわちワーキング・ハードからワーキング・スマー

トへの時代だ、というわけである。たしかに忙しくしている人がいい仕事をしていると必ずしも言えるわけではない。先日、ある企業でのべ1週間、オフィスに居らせてもらったら、大事な仕事で忙しい人と、つまらない仕事で忙しい人と、仕事はないのに忙しいふりをしている人と、堂々さぼっている人の4種類がいて、誰もそれをとがめないことを知ったのである（——堂々さぼっている者が究極のメニューづくりのため動員されている特権社員などではなかったことは言うまでもない——）。さすればしょせん、成果である——とも言えない。成果と報酬は関係がないことは珍しいことではないし、だいたい成果を気にしなくても幸せでありうるのが人間である。それに、だいたいハード・ワーキングではなく、スマート・ワーキングだと言ったところで、それでもやはりワーキングであり、決して仕事＝罪悪観へと離脱できてはいない。

残業を減らすには、休日をとりさせるには、労働時間短縮への大きなうねりを作り出すには、スマートに働くことすら不可能なように仕事をつまらなくするのが一番いい。仕事をきつくするのがいい。やってられるか！という状態にするのがいい。その結果、仕事を休む人が増えるのはいいことかと反省する者は筆者ひとりにまかせればいい。しょせん、仕事さと諦めればいい。いくら働いても楽にはならない。階層は変えられないと諦めさせるのがいい。さすれば、ゆとりが生まれるであろう。さぼりとの差はどこにあるか、わからなくなるであろうが。家など持てない社会にすればいい、そうすれば35年ローン返済のためにあくせくすることはないはずである。

しかし、もはや高潔な僧侶の時代ではない。無常観の支配する時代ではない。すずめはなぜ強風の中でも電線に止まっていられるか——物理学的な問題ではない、要するに落ちてもとべ

るから余裕をもって止まっているのだ（森政弘）。こういう余裕をもっともっともっと……ほしいというわけである。

不平不満症候群は労働組合に希望を与える

第一命題：志しの高さが不満を呼ぶ——これはいいことではないか。第二命題：忍耐のなさが焦りを呼ぶ——これと第一命題との区別はわからない。しかし不満と焦りがある限り、労働組合は減びることはない、何の自己革新をしなくても。同時に労働組合がまだまだわれわれの生活は苦しいと言っている間は、企業経営者も胸をなでおろすべきところがある。すなわち俺たちはもう豊かだから、賃金はいらぬ、働きたくない、という者が少なくなるだろうからである。しかし、なんということか、固く暗い労働組合の「動員」（強引と読むべき声あり）に若者は従わなくなっているのである。身の回りの幸せに酔っていたい若者の志しが低くなって、不満は少なくなったからといって、しかしますますカネがほしいという焦りがなくなったわけではない。石の上にも30年と、将来をあてにしてガマンすることなどしない若者は、「いま・すぐ症候群」の虜となり、労働組合に新しいバネを与える可能性がある。忍耐が必要だ、近視眼的な発想ではだめだ、と説いても無駄である。近視眼的経営がアメリカの経営を減ぼした、日本の長期的な視野にたった経営を見習え、と、アメリカの経営者が大挙して教会にでかけた。そして祈った——「神様、忍耐力を下さい、今すぐに！」。

労働者に規律と忍耐を教えてきた製造業が衰退し、忍耐を蔑視してきた商業が栄える時代になった。ある月賦販売会社のコマーシャルは、ずっと昔に言った——「なぜ明日まで待つのか？」と。かくして、こらえしょうのない若者に頭を下げる時代が始まった。ビジネスマンの新聞

だった日経新聞までが若者に見習えと言う。労働省は一生懸命働いている課長を軽蔑するポスターを配布した——OLたちが浜辺で遊ぶ写真に「課長さんに教えてあげたい、休みがため」とコピー。

かってねばり強くナチスの攻撃に耐えたウィンストン・チャーチルは母校に招かれて、演説を頼まれた。キケロ以来の名演説で名高いチャーチルの言葉をひとこともらさずメモしようと、学生たちは固唾をのんだ。壇上に現れたチャーチル、ただ「NEVER! NEVER! NEVER! NEVER! GIVE UP! (決して、決して、決して、決して諦めるな!）」と言っただけで壇を降りたのである。こんなことを、入ったその日から転職を考えるフリーター予備群の若者に言う社長があるわけではない。

本人しだい、の論理を組み込んだ労働研究を

目標を他に常においてきた日本は、外国を追い越したときに、自ら目標となることを放棄し、いや実はちっとも追い越していない、まだまだ道は遠いと精神的に後退し始めているのではないだろうか。もはや乏しきを憂うのではなく、均しからざるを憂うべきであり、従って富める労働者は率直にそれを認めて富まぬ仲間譲る（——端的に言って、例えば労働組合あげて土地保有への重課税を提案しようというときに、100坪以上保有している組合員はこのささやかな土地をもってどこが悪いなどとは言わないとか、資産1億以上の組合員は賃上げゼロにする——）べきではないだろうかと言っても、全ての労働者はみんな被害者、いや農民も中小企業経営者もみんな貧しいと言っているほうが、あたりさわりがなく楽なのである。国であろうが人であろうが一定の水準に達すると守りの姿勢になる——「征服を遂行してゆくのは容易である。それは、全力を注いでなされるから

である。征服を維持してゆくのは困難である。というのは、防御のためには、自分の力の一部分しか用いられないからである」(モンテスキュー『ローマ人盛衰史』)。「恒産なければ困って恒心なし」従って「恒心」がないのは「恒産」がないからだ、もっともっと産がほしいと攻撃的な労働意欲もりたてを肯定する者が忘れてるのは、『孟子』の元の文章では「恒産なくして恒心あるは、ただ士のみよくすとなす。民のごときはすなわち恒産なければ困って恒心なし」となっていることである。すなわち、教養と文化を会得し社会的使命を理解している高潔の「士」は恒産がなくてもこころは豊かでありうると言っているのである。さようなご立派な人がそう多くないのは世の常である。まして恒産がない(——恒産かどうかの判断も、よくよく考えればこころ次第である——)「民」が気分次第で動くのは世の常である。

労働研究はしばしば、労働者の「客観的属性」で労働者の境遇を記述しようとする。「客観的属性」の規定力がきわめて大きいと信じてきた唯物論的立場にたった労働問題研究の影響もあるのであろう。東欧の民衆がマルクス主義にサヨウナラをしたのは、自分たちが不幸であると気が付いたココロのせい、客観的に不幸であったからか、どうかはわからない。しかし、どう考えてみてもココロの動きや従ってその個人差は重要である。セクシャルハラスメント問題にしても、ある行為をどう感じるかに関わるところが大きい。持ち主の知性と反比例するように思える隣の犬の声の回数も、持ち主には名犬の証拠である。まして個性化、多様化の時代である。

さて何かというと労働経済学、労働法学、労働社会学が出しゃばってきた労働研究にも(——私のような労働社会学者としては、労働経済学、労働法学の陰でひっそりと生きてきた

つもりがあるが——)、もっと個人の気分、時代の雰囲気、職場の心理、個人の感覚への視点を大胆に取り入れた研究がほしいところである(——唐突な結論であるが、これが気分の特徴である——)。

川喜多 喬

生年月日：1948年1月

最終学歴：東京大学大学院社会学研究科

現職：東京外国語大学助教授

主な著書名：「産業変動と労務管理」(主著)

「労働調査論——フィールドから学ぶ」

(共著)(いずれも日本労働研究機構)

「古今東西大富豪ガイド」

(TBSブリタニカ)

「ワーキングフリー」(有斐閣)

(いずれも訳書)